

【記録】市町村公民館講座等担当者会（兼第2回連携協議会） グループ協議

1. 開催概要

- ・ **日時:** 令和8年8月19日（水）
- ・ **場所:** 県防災庁舎7階 73号
- ・ **出席者:**
 - ・ 進行・アドバイザー: 千葉大学大学院 助教 橋田慈子氏
 - ・ 各グループ（施設関係者、支援学校関係者、社会福祉協議会、生涯学習課ほか）
 - ・ 事務局: 生涯学習課
- ・ **テーマ:** 「障がいのある方の意見を生かして講座を考えてみよう！」

2 全体共有

グループ1
【要約】 ・ 現状と課題: ・ 講座内容や現地の雰囲気や予測できないことに対する「強い不安感」。 ・ 「生涯学習」という言葉自体が当事者家族に馴染みがなく、行政の窓口や公式HPの情報発信ルートでは当事者まで情報が届かない。 ・ 工夫・改善点: ・ スモールステップの講座デザイン: 格式張った開会式などを行わず、挨拶や簡単な握手（スキンシップ）などの「ゆるいアイスブレイク」から始める。 ・ 予測可能性の提供（動画活用）: 事前にどのような活動をするのか、過去の様子やイメージをYouTube動画等で視聴できるようにすることで、「これなら行けそう」という安心感（事前学習）を提供する。 ・ 情報プラットフォームの集約: 「ここに行けばすべての障がい者向け学習情報が載っている」というポータルサイトの整備。 ・ 福祉ルートからの逆アプローチ: 教育（行政）ルートではなく、普段から身近に利用している「福祉サービス（相談支援事業所やヘルパー事業所等）」の窓口から案内を届けることで、保護者の信頼と興味を引き出す。 ・ 1回限りのイベントで終わらず、リピー特参加できる「継続性」のある仕組みづくりが重要。

グループ2
【要約】 ・ 現状と課題: ・ 魅力的な講座（例：お菓子作り等）を企画しても「参加者が集まらない」。 ・ デジタルシフト（ペーパーレス化）によりチラシが減りスマホ広報が増えているが、手話を第一言語とする聴覚障がい者にとって、テキスト（日本語の文章）だけによるスマホ広報は十分な情報保障（理解・納得）になっていない。情報が物理的・言語的に届いていない現状がある。 ・ 工夫・改善点: ・ 安心感を与える一筆: 広報媒体に「障がいなどがありましたら、お気軽にご相談ください」と一言添えるだけで、問い合わせへの心理的障壁が劇的に下がる。 ・ 信頼できるキーパーソンの巻き込み: 手話サークル等のリーダーなど、当事者が「この人が言うなら安心だ」と信頼しているコミュニティのキーパーソン（パイプ役）に直接情報を預け、そこから口コミで届けてもらうアナログなルートを確立する。 ・ 地域ボランティア（高校生等）を巻き込み、インクルーシブな輪を広げる。 【橋田アドバイザーより】 ・ 情報発信側が「届けているつもり」であっても、当事者側には「自分が行ってもいいのだろうか」という強い躊躇がある。 ・ 「障がいのある方はご相談ください」という一言の有無が、当事者にとっての「参加許可証」のような役割を果たし、心理的障壁を大幅に下げる。

グループ3

【要約】

- **現状と課題:**
 - ・ 施設のバリアフリー状況、講座内容が自分向けかどうかの不明瞭さ、参加費、交通手段が障壁となっている。
 - ・ 「周囲に迷惑をかけてしまうのではないか」という当事者・保護者の心理的不安が非常に大きい。
- **工夫・改善点:**
 - ・ **広報の工夫:** 写真を多く使った視覚的に分かりやすいチラシを作成する。また、チラシの配布だけでなく、信頼関係のある関係者から「直接口頭で勧める（フェイス・トゥ・フェイスの案内）」ことが最も効果的。
 - ・ **プログラムの配慮:** 体力的な負担（疲れやすさ）を考慮し、「短時間設計」にする。また、事前に「休憩スペースがあること」を明記・案内し、安心感を与える。
 - ・ **成功事例の共有:** 過去に開催された「無料のズンバ（ダンス）講座」では実際に5名ほどの当事者が参加できた実績があり、広報を強化すればさらなる参加増が見込める。

【橋田アドバイザーより】

- ・ 実際に障がいのある方の参加は、ちょっとした工夫で広報していけば、もっと増える可能性がある。今回考えていただけて良かった。

グループ4

【要約】

- **現状と課題:**
 - ・ 過去に土曜午後に講座を開催した際、施設利用者は職員の付き添いで参加できたが、特別支援学校は保護者の送迎が必要となり、結果的に当日欠席が相次ぎ参加者がゼロになってしまった。
 - ・ 会場へ足を運ぶための「移動手段・参加日程」の確保が大きな課題。
- **工夫・改善点:**
 - ・ 土曜日に開所している「放課後等デイサービス（放デイ）」と日程を調整し、土曜午前中などに設定することで、放デイのプログラムとして子どもたちが参加しやすくなるよう工夫する。
 - ・ 作業中の空き時間や待ち時間を活用し、参加者同士が自然に交わる「交流の場（時間）」を意図的に設ける。
- **地域資源・ボランティアの活用:**
 - ・ 協力先として、市内の大規模福祉施設（さんさん会）、社会福祉協議会、手話サークル等と連携する。
 - ・ ボランティアとして、地域の関係各所や中学生・高校生にも広く声をかける。
 - ・ 障がいの有無に関わらず「同じ街で共に生きている」という意識を地域全体ではぐくむことを目指す。

【橋田アドバイザーより】

- ・ 放課後等デイサービスとの連携という具体的なアプローチを高く評価。
- ・ 千葉大学での実践経験からも、障がい当事者は「障がい者だけの空間」にとどまらず、多様な人々と話したいという強い交流ニーズを持っている。
- ・ ただし、初対面で急に交流するのは難しいため、「アイスブレイク」等を取り入れて、心理的ハードルを下げながら楽しく交わる工夫が有効である。

グループ5

【要約】

- **現状と課題:**
 - ・ 特別支援学校と連携したイベント実績はあるが、「移動手段の不足」「初めて参加する際のハードルの高さ」「スタッフや施設の受け入れ態勢（バリアフリー対応可否）」「効果的な告知の難しさ」が課題。
- **工夫・改善点:**
 - ・ **移動手段:** 教育委員会が保有する公的バスサービスなどを積極的に活用・要望する。

- ・ **広報デザインと「魔法のキーワード」**：活動の雰囲気が伝わる写真をチラシに載せる。さらに、当事者の動機付けとなる強いキーワード（例：視覚障がい者の方にとっての「食べる」「喋る」「歌う」など）をアイキャッチとしてチラシに盛り込む。
- ・ **広報ルートの拡大**：特別支援学校や福祉施設ルートだけでなく、地域の病院（看護師や医師からの直接アプローチ）、特別支援学級を持つ小・中学校、不特定多数が集まるスーパーなどへ配架・周知ルートを広げる。

【橋田アドバイザーより】

- ・ 「響くキーワード」という着眼点がよい。
- ・ （例）知的障がいのある当事者に対しては「ワクワク」という言葉が非常に響きやすい。
- ・ 写真を用いて実際の楽しそうな様子を視覚的に伝えることで、初めて参加する人の不安を大きく和らげることができる。

【橋田アドバイザーより】～全体を通して～

- ・ 各グループから出た、これまでにない視点での丁寧な情報発信や小さな配慮を実践することで、当事者の「学びたい・交流したい」という本質的なニーズに応えることができる。
- ・ 完璧なマニュアルを求めて立ち止まるのではなく、「少しずつ実践しながら（走りながら学ぶ）」という姿勢が、公民館職員や運営側の成長にとっても極めて重要。
- ・ 間口を広く「開いていく」ことこそが、インクルーシブな地域づくりと生涯学習の発展につながる。